

『今月の天候と農作業』

通巻第5697号
3月号
令和7年3月6日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

特になし

【予報のポイント】

期間のはじめは暖かい空気が流れ込みやすいため気温が高くなります。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	50	30
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天候は、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、九州南部で平年並の確率50%です。

<1 週目の予報> 3月8日(土)～ 3月14日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。

<2 週目の予報> 3月15日(土)～ 3月21日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から4週目の予報> 3月22日(土)～ 4月4日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報
(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 育苗管理

育苗では、温度とかん水の管理が重要です。温度は、緑化期の日中25℃、夜間15℃、硬化期の日中20℃、夜間10℃を目安に管理します。また、田植えの7日前頃から、苗を外気に慣らすようにします。かん水は、午後に行くと床土の温度が下がり、多湿となるため午前中に行いましょう。

2 本田準備

除草剤の効果を安定させるためには、代かき作業でほ場を均平にすることが重要です。基肥の施肥時期が早過ぎると成分が流亡するため、代かき頃に施用します。

3 移植作業と除草剤散布

寒波が来る時は移植を延期します。移植後、活着するまでは植傷みを軽減するために深水にします。活着後も、低温や霜の予報が出た際には、深水で管理しましょう。

また、いもち病対策として移植前又は移植時に箱処理剤を施用しましょう。

除草剤の薬剤の効果を安定させるために、散布後7日間は落水をしないようにします。

◆麦類

1 排水対策と病害虫防除

雨が多い時期となるため、ほ場の周囲や畦間に排水溝を設けるなど、排水対策を行います。

赤かび病の防除は、裸麦や小麦では穂揃期に、大麦では穂揃い期から7～10日後（葯殻抽出期）に行い、その7日後頃に追加防除を行います。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆共通事項

日射量の増加により蒸散量が多くなるため、かん水間隔を短くして回数を増やすことで全体のかん水量を増やすようにします。

◆きゅうり

日射量の増加に伴う高温乾燥により葉の老化が進み、草勢が低下しやすくなります。この対策として、内ビニールなどを活用し、日射を弱めるとともに、湿度を確保します。高温になると果形も乱れやすくなるため、十分な換気をします。

日中に高温となるハウスの西側では、収穫位置が高くなりやすいため、黒マルチなどによるサイド面の遮光や換気等により生育を調整しましょう。

◆ピーマン

ハウス内が高温になると受粉がうまく行われず、奇形果や果実の肥大不良による赤果等が発生しやすくなります。ハウス内が高温多湿にならないよう換気を十分に行います。

気温の上昇とともに果実の肥大が早くなるため、最低でも3、4日間隔での収穫を心がけ、草勢維持に努めます。

◆トマト類

ミニトマトは、気温上昇に伴い裂果が発生しやすくなります。土壌水分の急激な変化が主な原因であるため、少量多回数のかん水を行います。

トマトは、高温乾燥下で尻腐果が発生しやすくなるため、かん水量を増やします。

◆いちご

施設内温度が上昇すると、ハダニ類の発生が多くなります。薬剤が均一に付着するよう、古葉や収穫の終わった果梗をこまめに除去し、定期的な薬剤散布を行います。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆さといも、かんしょのほ場の準備

各種病害の伝染を防ぐため、ほ場の残さは可能な限りほ場外に持ち出します。ほ場外に持ち出せない場合は、トラクターで耕うんして残さを破碎します。土壌消毒は、地温が15℃以上になってから行います。また、病害の発生拡大を防ぐために、ほ場を移動する時は、長靴や農機具を洗浄しましょう。

◆さといも

早生種の定植期です。連作障害が出やすいため、4年以上作付けをしていないほ場を選びましょう。

種いもは病害虫の被害や芽つぶれがあるもの、水に浮くものは除去します。また、センチュウや疫病を防除するために種芋を消毒します。消毒の際は、種芋の表面に薬剤がしっかり付着するよう、土を洗い落としてから行いましょう。

◆食用かんしょ

トンネル栽培では生育期の葉焼けを防止するために、換気を行います。また、苗床では徒長を防止するために、気温の高い日は換気を行いましょう。

育苗中に葉の萎縮・変色や地際部の茎の枯れ・黒変、芋の腐敗が見られた場合は、基腐病が疑われます。生育が異常な株は速やかに除去します。また、採苗は地際から5cm以上離れた位置で行い、採苗後は薬剤で消毒しましょう。

(中村 剛)

果樹

Ⅰ 常緑果樹

◆かんきつ全般

樹勢強化や新梢・花芽の充実のために春肥を施用します。春肥の吸収効率を高めるためには、速効性の肥料を萌芽直前に施用するのが最も効果的です。本年は着花量が多く、新梢量が少ない表年の予想です。時期を逃さないように早めに準備しましょう。

◆完熟きんかん

収穫が終了したら、剪定の時期です。剪定は樹勢や樹齢を考慮し、間引き剪定を基

本にバランス良く枝を配置します。剪定の遅れは新梢の充実を遅らせ、一番花の結果率を低下させるため、3月末までに終わらせます。また、樹勢回復の為に、剪定終了後は土壌改良を行い、細根発生を促しましょう。

◆日向夏

今月は露地日向夏の収穫が始まります。減酸の早い早生系から収穫を開始し、在来系は減酸を確認してから収穫します。

袋掛けをしていない果実や、園地の中で特に冷気が溜まりやすい場所の樹冠表面に結果している果実は、寒波によるす上がり果の発生が懸念されます。果実の大きさに対して極端に重さが軽い場合は、中身を確認して収穫するなど、す上がり果の混入がないように注意して選別・出荷しましょう。

◆マンゴー

3月に入り、夜間の外気温が上がってくると加温機の稼働時間が短くなるため、ハウス内の湿度が高くなります。早期出荷作型ではあざ果の発生、後期出荷作型でこれから開花を迎える園では開花期の病害発生に注意が必要です。早朝換気や送風機能の活用、夜間の十分な加温によって湿度を低く保ちます。

また、日射も強くなってくるため、早期出荷作型では日焼け果が発生することがあります。遮光ネット等を利用し、日焼けを防止します。

2 落葉果樹

◆梅

開花期～展葉期にかけて病害虫が一斉に発生するため、予防的防除や初期防除を徹底しましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆夏秋ギク

6～7月出荷作型の定植時期です。

6月出荷作型の「フローラル優香」は、生育期間を通して低温に遭遇すると貫生花が発生しやすくなるため、電照期間中から温度確保に努めます。

「精の一世」は、親株時の低温遭遇によって幼若性を獲得している場合があるため、定植後から夜温13℃以上で管理を行います。

◆スイートピー

気温上昇と天候不順による草勢低下を防ぐため、施肥やかん水をこまめに行います。

また、結露による花シミの発生リスクを下げるため、循環扇の活用や、換気、早朝加温などで施設内の湿度を下げましょう。

◆デルフィニウム

気温の上昇に伴い茎が軟弱になりやすい時期です。ボリュームを維持するため、日中の換気を十分にいき、必要に応じて葉面散布等による追肥を行います。

◆ホオズキ

8月出荷作型の定植時期です。萌芽時の生長点の焼けを防ぐために、マルチの穴あけは遅れないようにしましょう。

また、気温の上昇に伴い、ハウス内への害虫の侵入が多くなるため、防虫ネットの設置やほ場周辺の除草を行います。

◆ラナンキュラス

気温が上昇し、草勢が低下しやすくなるため、かん水や低濃度での追肥をこまめに行います。

また、花シミや灰色かび病の発生防止のために、循環扇の活用や微生物農薬のダクト散布を継続して行います。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

令和7年2月14日現在、全国14道県において本県の2例を含む51例の鳥インフルエンザが発生しています。また、県内に飛来する野鳥や環境試料(水)からもウイルスが確認されており、養鶏場への侵入リスクが高い状況が続いています。農場を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人、車両、物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく侵入防止対策を徹底しましょう。

◆家畜

今月は外気温の日較差が大きくなることから、家畜や家禽の免疫力が低下し、呼吸器病等の感染症が発生しやすい時期となります。気温が上がる日中は畜舎カーテンを開け、換気扇やファンをゆっくりと回し、換気を十分に行いましょう。

また、乾燥すると埃や塵が滞留し、呼吸器病の原因となりやすいため、細霧器等を使用して湿度を適度に保つなど、畜舎内の温湿度環境を整えます。病気の発生時は早期に対処できるよう、家畜の健康状態の確認を徹底しましょう。

◆飼料作物

イタリアンライグラスやエンバクの収穫作業や次の作に向けての準備が始まります。作業に向けて機械の点検を行い、飼養管理に影響が出ないように計画的に作業を行いましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

1 春整枝

春整枝は、2月下旬～3月上旬の平均気温が10℃となる頃を目安に実施します。整枝は、葉層を8cm程度確保できるように、昨年最終摘採面から2、3節程度上げた位置で行いましょう。

秋整枝を実施した茶園では、越冬芽を切らない高さで丁寧に整枝します。ただし、昨年秋に越冬芽の2割以上が再萌芽した茶園では秋整枝位置から0.5～1cm上げて再萌芽した芽を除去しましょう。

また、越冬芽の寒害（芽つぶれ）が多発している場合は、1、2節程度刈り落としましょう。

2 芽出し肥の施用

芽出し肥は、一番茶摘採の25日前までに硫安等の速効性肥料を施用します。各地域の施肥基準に準じて、うね間だけでなく雨落ち部まで広範囲に施用します。また、施肥後は、流亡防止と分解促進のために、畝間を軽く攪拌しましょう。

3 防霜対策

防霜対策は、秋整枝した茶園では一番茶萌芽の15日前から、春整枝した茶園では春整枝直後から開始し、いずれも一番茶の摘採が終了するまで実施します。防霜ファンの設定温度は、萌芽期前後は3℃、一～二葉期は5℃、二葉期以降は7℃とします。

スプリンクラーで防霜する場合の設定温度は2℃とし、日の出後の気温が5℃程度まで上昇し、葉の表面に付着した氷が自然に滑り落ちるまで継続します。

4 カンザワハダニの防除

カンザワハダニの防除適期は、産卵を開始する気温10℃となる2月下旬～3月上旬頃です。春整枝と裾刈り後は、速やかに地区の暦に準じ、裾部や葉裏へ薬液が十分にかかるよう散布しましょう。

5 苗の定植

露地で育苗した苗は、2月下旬～3月中旬が定植期です。ハウス等の施設内で育苗した苗は、定植後の極端な低温を避けるため、一番茶前（4月）が定植の適期です。

(竹田 博文)

◆しいたけ

1 採取

発生したしいたけは、目標の品柄に応じて適期に採取します。

雨子での採取は、乾燥に時間がかかる上、品質低下の原因になるため、なるべく晴天を選んで採取します。また、ほだ木の表面を傷めないように丁寧に採取します。

採取容器は通気性が良く、浅いもの（専用の採取カゴ等）を使い、ヒダに触れないよう柄を上にして入れます。採取後は、振動を少なくして、できるだけ早く乾燥場に運び、品質の低下を防ぐため、エビラなどに広げて速やかに乾燥します。特に雨子は素早く処理します。

2 乾燥

高温での急激な乾燥は品質の低下を招きます。乾燥初期は低めの温度設定とし、乾燥機内の温・湿度や換気に注意しながら徐々に温度を上げます。また、乾燥終了後は、傘の中央部と足の付け根が十分に乾燥していることを確認しましょう。

(田畑 美香)

関連情報

◆農作業安全

3月から春の「農作業安全確認運動」期間になります。

農作業の死亡事故で最も発生が多いのは農業機械による事故です。

このため、トラクターなどの農業機械で作業する際には、ヘルメットやシートベルトを着用するなど安全対策の徹底に努めましょう。

◆農薬適正使用

農薬の使用に当たっては、散布前に必ず農薬ラベルに表示された適用作物、適用病害虫、濃度、量、時期、回数等の使用方法をしっかりと確認しましょう。

散布時には、河川等の周辺環境、隣接するほ場の作物、周辺住民、家畜等に害を与えないよう周囲への飛散・流出に注意しましょう。

農薬散布後に、散布履歴を記帳するとともに、使用した防除器具を十分に洗浄しましょう。

◆堆肥による化学肥料削減

堆肥には、土壌改良材としての効果の他、肥料としての効果があります。

県が作成した堆肥利用に役立つ次の2つのツールを活用し堆肥を上手に使うことで、化学肥料の使用量低減、生産コスト削減に努めるとともに、環境に配慮した持続可能な農業に取り組みましょう。

「みやざきの堆肥検索サイト」

生産地や畜種、荷姿等から条件を絞って、県内の堆肥を検索できるサイトです。現在80事業者が登録しています。

「堆肥施用量計算カルテ」

化学肥料の代わりに堆肥を施用する量を計算できるサイトです。使う堆肥の種類を選択し、作物の施肥基準値を入力すれば自動計算されます。

(<https://miyazakitaihi.com/>)

(農業普及技術課)

内容の詳細について

3月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病	—	育苗時の発生の有無に関わらず、移植時の箱施薬を徹底します。
	スクミリンゴガイ	—	越冬場所である水田土壌表層部を細かく耕耘して殺貝します。土壌が硬いため、耕耘ピッチは小さいほど効果が高くなります。貝の生息量が多い場合には、防除薬剤の本田施用を実施します。
施設果菜類	病害全般	—	夜温が高く加温機が稼働しない日は、施設内が多湿になり、病害が発生しやすい傾向にあるため特に注意が必要です。
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病 褐斑病 灰色かび病	並 並 並 並	発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除します。多発したほ場では、7日間隔で複数回の連続防除を実施します。また、薬剤の感受性低下を防ぐため、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行います。
	黄化えそ病(MYSV) ミナミキイロアザミウマ	並 やや多	キュウリ黄化えそ病の発病株を確認した場合は直ちに抜き取り、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。
	タバココナジラミ	やや多	キュウリ退緑黄化病を媒介するため、特に、改植する場合は、次作に持ち込まないように注意します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介する害虫に対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後に蒸し込みを行います。
冬春ピーマン	斑点病 うどんこ病	多 並	斑点病の発生が多くなっています。多湿条件で発生しやすいので、施設内の適正な温湿度管理、排水対策を徹底します。発病葉は感染源になるため、できるだけ適葉し、施設外へ持ち出し処分します。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラズハナアザミウマ タバココナジラミ	やや少 やや多 並	いずれの害虫とも、今後、暖かくなるにつれて増殖速度が速くなります。特にアザミウマ類の発生が多いハウスでは、7日間隔で3回の連続的な薬剤散布を行い、防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病 灰色かび病 すすかび病 うどんこ病	並 並 多 並	すすかび病の発生が多くなっています。施設内の湿度が高くなると発病しやすくなるため、換気を行うとともに、適宜摘葉を行い、施設内が高湿度にならないよう管理します。いずれの病害も多発してからでは防除効果が劣るため、予防散布に重点をおきます。
	タバココナジラミ	多	タバココナジラミの発生が多くなっています。本虫は、今後、気温の上昇とともに飛来が多くなるため、低密度のうちに防除します。
冬春いちご	うどんこ病 炭疽病	やや多 やや多	いずれの病害も多発してからでは根絶は困難なため、低密度のうちに定期的な防除を行います。
	ハダニ類 アブラムシ類 ヒラズハナアザミウマ	並 並 並	ハダニ類は、複数の殺ダニ剤に抵抗性をもつ個体群がいるため、物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込みます。 ヒラズハナアザミウマは寄生花率10%以上で被害果が発生する恐れがあるため、低密度時に防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病	多 やや多	いずれの病害も越冬病斑は伝染源となるため、発見したら直ちに剪除します。そうか病は、春葉での感染が多いと開花後果実への感染を抑えることは難しいため、発芽初期の防除は必ず行います。
	ミカンハダニ	並	ミカンハダニの生息密度が高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季(3月上中旬、萌芽前)にマシン油乳剤による防除を行います。
茶	カンザワハダニ	やや多	防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期(～3月中旬)です。株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているため、十分に薬液が到達するよう丁寧に防除します。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) 病害虫防除肥料検査センターのHPアドレスは、QRコードより閲覧してください。

